

「子どもがまんなか」をめざして

— 幼保連携型認定こども園への移行で得られた気づきと学び —

Finding the significance of “Child-Centered Practice”;

Things that we learned by transferring from kindergarten to Center for ECEC

八木いくみ¹⁾²⁾, 大石 成伸¹⁾³⁾, 池田 美穂²⁾, 松浦秩保子³⁾
山下きぬ子²⁾, 渡邊 知佐³⁾, 遠藤 知里¹⁾

YAGI Ikumi¹⁾²⁾, OISHI Shigenobu¹⁾³⁾, IKEDA Miho²⁾, MATSUURA Chihoko³⁾
YAMASHITA Kinuko²⁾, WATANABE Chisa³⁾, ENDO Chisato¹⁾

キーワード：実践研究、幼保連携型認定こども園

Keywords: Practical research, Center for Early Childhood Education and Care

本稿は、第10回幼児教育実践学会（2019年8月20日、於：常葉大学草薙キャンパス）での常葉大学附属とこは幼稚園・たちばな幼稚園の副園長、主任、指導教諭らによる研究発表を再構成したものである。

とこは幼稚園・たちばな幼稚園は、2018年より幼保連携型認定こども園に移行し、新たな保育のあり方を模索してきた。保護者の就労を支えることや行政との対応等の新たな課題が明らかとなる一方で、乳児保育により0歳児から5歳児までの子どもの育ちに対する理解が深まり、保育内容の充実を図ることができた。発表当日のフロアとのディスカッションでは、「子どもをまんなかにした保育」についての多面的な意見交換がなされ、豊かな学びの場となった。

1. はじめに

本稿は、第10回幼児教育実践学会における本学附属幼稚園の口頭発表の内容をまとめたものである。

幼児教育実践学会は、公益財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構が主催する全国研究会である。幼児教育の実践を豊かにし、幼児教育の有用性を社会に示すことで、子どもの育ちが最優先される社会が実現されること、保育者の実践的な研究発表を軸に、生きた研修のメイキングの仕方を学び、保育実践者と研究者が共に育ちあうことを目的としている。この学会は、参加者同士のディスカッションによる学びを重視している点がユニークである。

¹⁾ 常葉大学短期大学部 ²⁾ 常葉大学附属とこは幼稚園 ³⁾ 常葉大学附属たちばな幼稚園

例えば、筆者らが発表を行った口頭発表部門では、80分の発表時間内に、①実践報告、②参加者とのディスカッション、③実践報告とディスカッションに対する研究者からのコメント、を含めてデザインすることが求められ、さまざまな課題について対話的に探究する構成になっている。そこで本稿では、附属幼稚園の実践研究（口頭発表）にディスカッションおよびコメントの内容を加えて、その全体を研究報告としてまとめた。この取り組みが、附属幼稚園の今後の保育と本学の保育者養成に資することを期待する。

2. 口頭発表記録：「子どもがまんなか」認定こども園をめざして

本日はこちらの分科会にご参加いただき、ありがとうございます。本日は3部で構成しております。1部は、私たちを取り巻く地域環境や、幼稚園から認定こども園への移行についての概要を紹介します。2部は、認定こども園開園1年目の実践からの発見を、お話しします。3部は、私たちが目指す、『子どもがまんなか』の認定こども園とは、という気付きからの課題等をお話しします。2部と3部では、ご参加して下さる皆さまにご意見をいただきたい場面もありますので、ぜひご協力ください。

第1部 幼稚園から認定こども園へ…移行の経緯

皆様、ようこそ静岡へいらっしゃいました。横にも長い静岡は、新幹線の駅が6駅あります。でも停車するのは、ほとんど「こだま」だけです。「ひかり」は1時間に1本だけ、そして「のぞみ」はきれいに素早く通過していきます。「のぞみ」は止まらないという、ちょっと残念な静岡です。静岡といったら、富士山とお茶でしょうか。そして、日本で最も深い駿河湾には海の幸も豊富です。『ちびまる子ちゃん』が育ったのも静岡市の清水区、アニメにも描かれているような温厚な人が多い県民性なのではと思います。

(1) 静岡市の認定こども園の現状

静岡市では、全て公立幼稚園・保育園が、2015年にこども園として再編されております。また、待機児童対策にも積極的に取り組み、2019年4月現在は0名との報告も受けておりますように、子育てしやすい町をPRしております。市内の私立幼稚園の数は28園ですが、認定こども園への移行が27園と、私立の認定こども園も増えてまいりました。

私たちの園を少しご紹介いたします。大学附属の幼稚園として、とこは幼稚園・たちばな幼稚園の2園があります。とこは幼稚園は静岡市の市街地に、たちばな幼稚園は少し郊外に位置しております。施設としては、こども園移行前に幼稚園として建てられていたものを、最小限の工事で開園いたしました。園の規模は、こちらに示しました（Figure1.）。

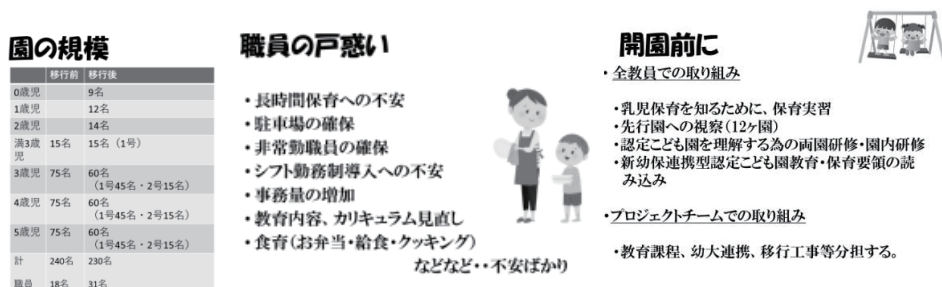


Figure 1. 認定こども園開園前の課題
(Figure 1. Challenges before opening the new center for ECEC)

(2) 附属幼稚園の認定こども園への移行…開園までの準備と模索

こども園開園にあたり、クラスの定員の人数を減らしました。そして乳児の定員を追加しております。職員は、長時間保育や乳児保育の対応のため、非常勤職員を増やしております。常葉学園の建学の精神である「より高きを目指して」に則して、さらに地域に求められる園になるよう、法人本部からの声で幼稚園から認定こども園への移行が決定いたしました。

しかし、まず私たちが立ち止まってしまったのは、保護者への説明でした。幼稚園のつもりで入園していた方がほとんどでしたので、説明会以外にも数回手紙を配布するなどし、ご理解いただけるようにしていきました。ただ、どっぷりと幼稚園に染まっていた私たち職員の不安はとて多く、前向きに捉えなければと思いつつも、長時間保育への不安、駐車場の確保、非常勤職員の確保、シフト制導入への不安、また事務量の増加、教育内容とカリキュラムの見直し、食育、またお弁当や給食、クッキングはどうすべきか、などなど不安ばかり募ってまいりました。

それでも、少しでもポジティブに捉えていけるように、今、何が必要なのか、職員で話し合いをし、取り組んでいきました。乳児保育を知るために、近隣の保育所に保育実習に行く、先行園を視察する、また、認定こども園を理解するために、両園研修や各園での園内研修、また、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の読み込みなど、自分たちにできることを考え、前向きに進めるように準備していきました。また、法人本部・大学・短期大学部と共にプロジェクトチームを立ち上げ、教育課程や連携について、また、移行工事等の話し合いも重ねていきました。附属園として、養成校の学生の学ぶ場としての使命も担っておりますので、より良い園を目指していくためにも、模索しながら進め、課題も多い状態ではありましたが、何とか開園を迎えることができました。

第2部 こども園1年目の実践～発見！子どもの姿から～

それでは、昨年度の実践より、子どもの姿を通して発見、再発見した点について振り返ってみます。初めて0歳児から2歳児を受け入れての気付きとして、満3歳児以上としか接していなかった私たちは、さまざまな子どもの姿に感心することが多々ありました。そこで、私たちなりにこれは発見かなと思った園児の行動、行為、姿を、大きく5つに分けてみました。

(1) 0歳児～2歳児の姿からの発見

まず、試す姿や探索行動です。こちらの写真は、1歳児のSちゃんが、最初はフェンス越しに見えるきれいな花に興味を示し、触ろうとしてフェンスのコンクリート部分に登ったのですが、フェンスが延々と横に続いていることに気付き、横移動を試してみたくなった場面です。③の写真から横移動の距離がお分かりになるかと思います。



Figure 2. 楽しみながら探索する子どもの姿
(Figure 2. Trying children having fun)

そして、繰り返し楽しもうとする姿や自己主張です。それから、年上の在園児のまねや憧れる思いです。(以下の事例について、写真省略) 3歳児以上の園児が運動会の遊戯を練習していると、手具を持って踊る姿に憧れ、自分もまねしたくなった1歳児のK君。その様子を見ていた保育者が、1歳児でも簡単に持つことができるボンボンを近くに置いておくと、早速持って、まねして踊り始めました。

これら、0歳児から2歳児の行動、行為、夢中になるその姿から、認識を深めた点として、大きくまとめると次の3点が分かりました。1) 自分の手、口、足などを使って、目で見ての実体験の必要性。2) 生活そのものが、その子の成長につながっている点。3) いまさらながらではありますが、環境の重要性です。

(2) 3歳児～5歳児の姿からの発見

次に、3歳児以上について改めて感じた点です。大きく4つに分けてみました。小さい子へ譲ろうとする姿や、思いやる姿。相手が分かりやすいように遊び方を教える年長5歳児の姿です。次に、自分より小さいということで、純粋に世話をしたいという思いや、そっと見守る姿、そして、発想の転換。(以下の事例について、写真省略) 最初に挙がった思いやりとつながっていますが、年長5歳児が自分たちの生活発表会を、0歳児から2歳児クラスの子どもたちに見て楽しんでもらおうと考えました。でも、会場が2階の遊戯室であることから「待てよ、0歳児、1歳児クラスの子は階段を上がったたり下りたりするのは危険だね。どうする?」と、相手のことを考えることから、発想の転換として「じゃあ、自分たちが出前発表会をすればいいんだ」と、0歳児1歳児保育室や、フラットでスペースにゆとりのある1階のエントランスで発表しました。

3歳児以上のこれらの姿から認識を深めた点をまとめると、1) 何かしてあげようという思いが達成され、その充足感から、また次も何かしたいというプラスのサイクルが生まれる点。2) 自分の思いで接することで、思いやりの心が育つ点。3) 相手のことを考え、そこから生まれる発想の転換。幼稚園だった頃はなかなか見えにくかった部分の育ちを感じられました。

(3) 保育者の変化

また、私たち保育者にも変化が見られました。1) 園児の年齢幅が広がり、園児を見取ることにに関して、より細かいところにも意識を向けてみるようになりました。2) 非常勤職員が増えたことで、大勢の保育者がいろいろな見方、捉え方をするようになり、子どもをより多面的な角度から見ようと意識するようになりました。これらが直接関係しているのか、自信を持って何かをする子どもの姿が増えたような気がします。

(4) 新たな課題

園児の年齢幅が広がり、良いことだらけかということ、こども園に移行して見えてきた課題も大きく、今、困難と感じている点もあります。長時間保育を受ける園児が増え、その年齢幅も広がり、クラス担任も延長保育や夕方保育に携わらなければならない日もあり、幼稚園の頃には普通にできていた学年の話し合いや、その日の保育の振り返り、園内研修の時間確保、園外研修への全員一斉での参加、翌日以降の保育準備等に費やせる時間がなかなか取りにくくなりました。また、就労している保護者それぞれの立場があるため、園の保育方針等の理解につなげることが課題となっている点、そして、もともと満3歳児以上の幼稚園だったため、固定遊具や園舎内のレイアウト等、施設、設備において0歳児から2歳児にとって

危険な所もあります。細かい点を挙げますと、まだまだたくさんありますが、自分たちの今後の課題として、1) 新たな園内研修への挑戦、2) 保護者の多様性への対応、3) 安全・安心・危機管理の見直し、の3点が挙げられました。

(ここで、ディスカッション「こども園化で見てきた今後の課題」が行われた。)

第3部 「子どもがまんなか」認定こども園をめざして

さまざまな課題がある中で、私たちが考えることの中心はいつでも子ども。『子どもがまんなか』って?…子どもを取り巻く環境には、保育者、保護者、地域の方の支えが必要不可欠なものだと考えます。子どもたちが安心して過ごし、この支えがあるからこそ、伸び伸びと健やかに育つことができると思います。『子どもがまんなか』になるには、保育者は、より充実した子ども主体の教育、保育を目指して、主体的な中に学びがあることを大事にしています。この部分は、今後もさらに深めていく必要があると思います。

(1) 附属幼稚園の取り組み

【保育者の挑戦…子どもたちの発想や思いを受け止める】(以下の事例・写真省略) 年長5歳児が、朝、園庭で遊んでいるとき、セミの幼虫が出て来た穴を見つけ、まだセミが中にいると思い、自分たちで考え設置した、セミの安全基地のような箇所です(写真:穴の周囲をコーンで囲み「せみがでできます。はいらないでね。」と書かれている)。仲間数人で、どうしたら踏まれず、安全に土から出ることができるか。この複雑に、そして緩く張られたホースとカラーコーンから、子どもたちの発想や思いが分かる遊びの場面だと思います。

【保育者の挑戦…チーム保育・研修】研修の充実、園内外の研修での学びが必要になるとも思います。こども園となり、一堂に集い研修をすることが限られ、難しくなりますが、時間をつくり、子ども理解や、子ども観の共有を深め、チーム保育ができるようにしています。

【保護者への働きかけ…ファミリーデー】もっと『子どもがまんなか』になるには、親子で過ごす時間の大切さも提案をしていき、行事内容の見直しが必要となることに気付きました。園任せにならないよう、親子で参加ができる機会を大切にしていきたいと思っています。例えば、園で子どもが楽しんでいることを、親子と一緒に体験できる機会「ファミリーデー」をつくることで、今、この時期にどのような経験が必要か知ってもらおうきっかけとなりました。

【保護者への働きかけ…家庭との連携・ドキュメンテーションの共有】『子どもがまんなか』、保護者への理解。園だけでは、子どもが健やかに育つことはできないので、保護者と共に育てるという意識が大切です。園と家庭が協力し合い、子どもの育ちを充実させていくのだと思います。日頃から、園での子どもの姿を保護者に伝え、家庭の様子を聞き、共に成長を喜び合い、また、子育ての喜びにつながることを大切にしています。クラス担任が保育の中で大切にしていることを、写真と共に掲示し、様子を伝えています。

【地域への働きかけ…地域に開かれたこども園】『子どもがまんなか』、地域に開かれたこども園。夏祭りへの招待など、近隣のかたがたに、こども園とはどんな所なのかと、園の活動を通して知っていただく機会をつくるようにしています。未就園児教室を定期的に開催し、子育てにおいて再確認をし、情報発信をしています。お米の収穫見学、七五三の祈祷をお寺の住職さんをお願いするなど、自然体験や文化、伝統に触れる機会をつくることで、地域の中でも『子どもがまんなか』にいて、成長の手助けをしてもらっています。

(2) まとめ…子どもをまんなかにして保育の實りを育てるためには？

こども園1年目。何もかもが初めてで、日々の生活に追われる中でも、研修を通し、乳幼児が、今よりもっと『子どもがまんなか』にいるためには、保育者、保護者、地域の方の支えが不可欠であり、子どもの育ちにつながっていることが分かりました。そして2年目に突入。今、子どもたちはこの木のようにさまざまな実をつけ、すくすくと育ってきています。そして、さらに大きく成長するよう、これからも一人一人の『子どもがまんなか』で育っていけるよう、保育者、保護者、地域の方の3者で協力していきたいと思ひます。

今よりもっと、『子どもがまんなか』にするために、皆さんの園ではどのようなアプローチをしていますか。

(ここで、ディスカッション「今よりもっと『子どもがまんなか』のこども園にするために」が行われた。)

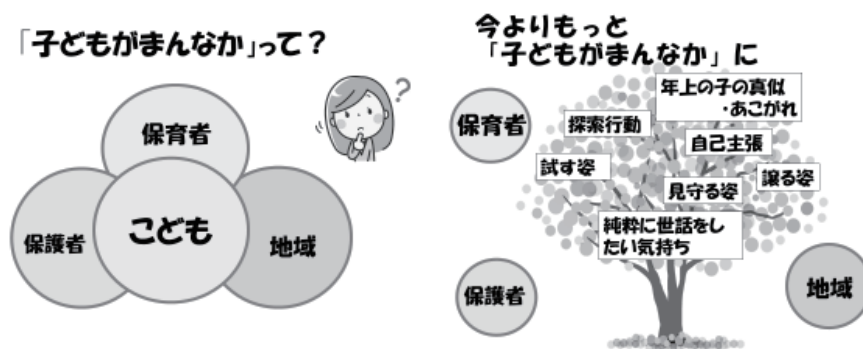


Figure 3. 今よりもっと「子どもがまんなか」にするために
(Figure 3. Our practical research question child-centered practice more)

3. 報告を受けて…ディスカッション

ディスカッションは、小グループで自由に意見交換を行う形式とし、短大保育科教員の進行のもとで実施した。参加者は6つのグループに分かれ、それぞれのグループに附属幼稚園の保育教諭も同席した。

ディスカッションは発表中に2回行われ、時間は各々およそ20分間であった。前半の発表「こども園1年目の発見」からは、こども園移行を経て顕在化した課題として、①話し合いや研修の時間確保、②多様化する保護者への対応、③幼児と乳児が共用する施設・設備の安全管理、の3点がディスカッションの話題として提示された。また、後半の発表「『子どもがまんなか』認定こども園をめざして」からは、「今よりもっと『子どもがまんなか』にするためには」という観点での問題提起として、①保護者へのアプローチ、②地域へのアプローチ、③保育者に対するアプローチ、の3点が同様に提示された。

ディスカッションでは、参加者がアイデアを提示しやすくするために、A3用紙に課題を印刷したフリップと、付箋(7.5cm角)を各テーブルに準備し、意見を可視化しながら話し合いができるよう環境を整えた。ディスカッション終了後には、付箋をフリップに貼付したものを壁面に掲示し、他のグループとも共有できるようにした。

以下、フリップに貼付された付箋の記述をそれぞれの課題や話題ごとに集約し、実践的な

知恵と工夫についての考察を試みる。

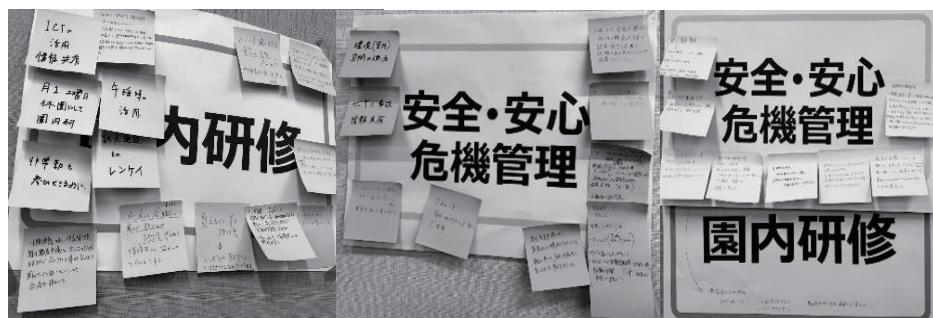


Figure.4 ディスカッションの内容を共有する
(Figure.4 Sharing of Discussion)

1) ディスカッション「こども園化で見えてきた今後の課題」

(1) 新たな園内研修への挑戦（時間確保や方法の工夫）

幼稚園から認定こども園に移行すると保育時間が長時間化し、研修に限らず、記録作成や情報共有等のためのミーティング等、いわゆる「ノンコンタクトタイム」の取りにくさが問題となっている。「学年毎、あるいは幼稚園部、保育園部それぞれでは研修や話し合いができるが、全体で共有することが難しい。」「勤務がシフト制のため、全員参加の話し合いを持つことが難しい。」といった「全員での共有の難しさ」が、問題点として指摘された。

研修や話し合いの時間確保のための工夫として「定期的に時間を決めて行う」が挙げられた。午睡の時間や預かり保育の時間等に、週1回等定期的に設定するものであった。また、「土曜日を月1回休園にして園内研修を実施している」、「保護者にも協力してもらい年に1～2回の研修日を確保する」等、全職員が保育を離れて研修や話し合いを行うことができる日を設ける「ノンコンタクトデー」の取り組みも挙げられた。

また、情報共有の方法として「ICTの活用」、「写真の活用」が挙げられた。全員が同じ時間に集まることは難しいが、情報を「見える化」することで、各々が空いている時間に共有することができる。いつでもアクセスできるようにしておくことの利点がある。

園内研修に関しては、定期的に行う工夫、短時間で効率的に実施する工夫、全員一致のノンコンタクトタイムがとれなくても行える方法の工夫が重ねられてきたようだ。

(2) 保護者の多様性への対応（様々な立場の保護者）

こども園では、就労している保護者と就労していない保護者の両方に協力を求めなければならない。また、国際児や外国籍児の保護者に対しては、日本語でのコミュニケーションが難しい場合もある。また「親としての責任感」や「家庭での生活習慣」等にも濃淡があり、状況の理解に差がある場合もある。いずれも「大切なことが保護者にうまく伝わらない」という壁をどのように乗り越えていくかが課題となっているようだ。

保護者への対応の工夫を集約すると「重要事項の連絡方法や説明方法の工夫」、「園と保護者の双方向の情報発信の工夫」、「保護者参加の機会を平等に作る工夫」といったものが挙げられた。「重要事項の連絡方法や説明方法の工夫」では、口頭での伝達と文書での伝達それぞれに工夫が見られた。口頭での伝達は、保護者全体への伝達の機会を大切にすること、個

別の伝達事項を保護者に誰が伝えるのか（園長か主任か担任か）を管理職が調整する、等が挙げられた。文書での伝達では、簡易化（連絡事項を記入する用紙をあらかじめ作りそれに記入して連絡帳に挟む）、外国籍保護者宛の手紙の工夫、等が挙げられた。また、園から伝達すること以外にも目を向けると、保護者が発信する内容を精査する、保護者の保育参加で理解を深める、等の方法も挙げられた。

(3) 安全・安心・危機管理の見直し（乳児と幼児が共存する環境）

「乳児の目線を知ること」は難しい。幼稚園から移行した認定こども園では、遊具や設備が幼児の体格に合わせて作られており、乳児が使う際に危険を伴う場合がある。また、建物や園庭を新設する場合、乳児用施設と幼児用施設を分けるべきかどうかという判断にも迷う。ここでは、「幼児と乳児が混在する場合の安全管理」、「安全管理の実施方法」、「乳児への配慮事項」についての情報が共有された。

「幼児と乳児が混在する場合の安全管理」では、乳児の挑戦心をつぶさずに安全に遊べる工夫、乳児用遊具では物足りなくなる2歳児への対応、等が話題になった。「安全管理の実施方法」では、「遊具・設備の定期的な安全点検（担当者・担当箇所を決めておく、点検記録を写真で残す）」、「ヒヤリハット事例の報告と共有」、「園庭マップで危険箇所の把握」等が挙げられた。「乳児への配慮事項」では、「睡眠チェックリストの使用」、「乳児の散歩コースの再検討」等が挙げられた。

2) ディスカッション「今よりもっと『子どもがまんなか』のこども園にするために」

(1) 保護者に対するアプローチ

保護者に対するアプローチでは、前半のディスカッションと共通する部分が多かった。子どもにとって何が大切か、ひとりひとりに丁寧に対応すること、保育を見える化すること、など、基本的なことを続けていくことで、保護者が協力的になるという意見が出されていた。園側と保護者側の相互性を重視することが大切であるようだ。

(2) 地域に対するアプローチ

地域のさまざまな人材とつながることで、豊かな体験の機会を得ているという意見が多く見られた。集約すると「子どもが地域に出掛ける」、「地域の人に園に来てもらう」、「園を中心とした人的つながりを広げる」などのアプローチが示された。「子どもが地域に出掛ける」では、お泊まり保育の際に地域の商店で買い物をする、農業高校で田植え体験をさせてもらう、地域の方の畑で収穫体験をさせてもらう、地域のお祭りに参加する、敬老会に参加する等が挙げられた。「地域の人に園に来てもらう」では、園でのお祭りに参加してもらう等があった。「園を中心とした人的つながりを広げる」では、小学生講座(卒園児の小学生を受入れる)、父母の会のサークル活動等が挙げられた。

(3) 保育者に対するアプローチ

「保育者どうしの共通理解」、「保育者どうしが思いを伝え合う」ための工夫として、ポートフォリオ等の「記録を用いて共有する」こと、また遊びを通して他のクラスとつながりを持つよう意図的に働きかけるなどして「保育の中で共有する」こと、が挙げられた。また、業務を見直し「本当に大切なこと」を整理する必要性も指摘された。保育の周縁的業務が複雑化・多様化する中で、シンプルにすることによって保育の本質に立ち返ることができるのではないだろうか。

4. 報告とディスカッションを受けて…今後に向けてのコメント

報告とディスカッションの内容を踏まえ、今よりもっと「子どもがまんなか」のこども園として最善の保育とは何かを今後引き続き探究するために、以下の2点がコメントとして示された。

1) 保育をひらくーみんなでかかわる・考える 知恵と工夫の共有

保育という営みの場は、みんなで関わっていくこと、みんなで考えていくことができる、豊かな相互作用の場である。どこの園でも同じような課題がある。その中でさまざまな知恵や工夫を、お互いに共有していくということが求められているのではないか。知恵と工夫を共有することや、みんなで関わったり考えたりすることが、保育を開くことを容易にし、課題を解決することにつながっていくのではないか。

2) 先生も子どものまんなかー「保育者の主体性」も保証

実践事例を見ると、「子どもがまんなか」は既に十分に達成されているようにも思われた。先生方は日々の保育の中から意味を紡ぎ出すことを助ける存在でもある。附属幼稚園でも、いろいろな形でドキュメンテーションを出しており、見た人がいろいろと感じたり考えたりしていると思う。一方、保育の時間の中で、お互いに子どもたちのことをお互いに情報交換している保育者の姿もたくさん目にした。わずかな時間でも、子どものことを『まんなか』に考えて、言葉を交わしているというところが大切だという印象を受けた。

『子どもがまんなか』について、保育者も子どもたちの『まんなか』にいられるということが大切と考える。つまり、保育者の主体性を保証するということである。保育者も、生き生きと保育ができるということ、つまり子どもと一緒に先生も毎日生き生きしていられるというところが、『子どもがまんなか』ということにつながっていくのではないか。

5. おわりに

幼保連携型認定こども園への移行は、とこは幼稚園・たちばな幼稚園の両園にとって保育のあり方を見つめ直す機会となった。移行1年目から2年目の最も多忙を極めた時期に子どもをまんなかにして研究を重ねたことは、こども園としての保育の基盤を固める重要な取り組みだったのではないだろうか。

今回の発表の中で最も印象に残っているのは、乳児の姿から『「実体験」が必要不可欠』、「生活の中で起こることすべてがその子の成長に繋がっている」、「近くに真似したくなる存在がいる環境の大切さ」ということに対する認識を深めたという部分であった。それはなぜか。乳幼児期のみならず、このことは生涯を通しての人の成長に深く関わる部分だと考えられるからである。これは短大での保育者養成にも必ず活きる観点と考える。

これからも、育ちを貫く軸を「実体験」・「生活」・「子ども集団」の中に見通し、子どもをまんなか、先生たちも生き活きと輝く附属幼稚園であり続けてほしい。

謝辞

本研究の発表準備、発表当日の記録、ディスカッションの進行、本報告の原稿作成にあたり、常葉大学短期大学部保育科の先生方には多大なご協力を頂きました。ここに記して感謝を申し上げます。